＊湘南遺産プロジェクトHP＊

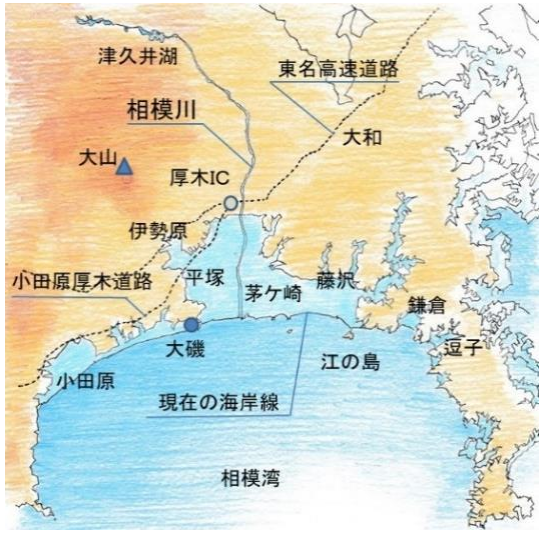
湘南の由来
ショートショート
第３話-1

“湘南”という地域呼称はどこから来たのか？ その疑問に迫るショートショートの第3話

えと文　和田精二　2020,10,20

3-1相模川にはじまる“湘南”

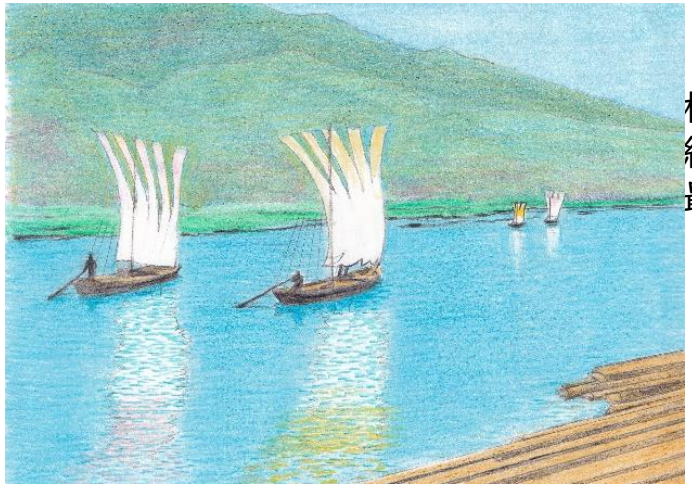
相模川は 関東山地から相模野台地へ出たあたりで一挙に川幅を広げる。
相模湾から遠く離れたこの地に 明治22年 “湘南村”が誕生する。
もともと“瀟湘湖南”は 川と湖がおりなす景観に発したから
相模川の上流に湘南村が誕生してもおかしくない。



縄文海進地図によると、湘南湾とでも形容できる海域が、東は藤沢、北は伊勢原から厚木方面にまで広がっていた。

縄文海進が終わり、広大な海域が陸地と化した後、平野部を貫いて “相模川”が“相模湾”に注いだ。
“湘南”の由来を探っていくと、この海域の入口に位置する大磯から いったん相模川をさかのぼることになる。

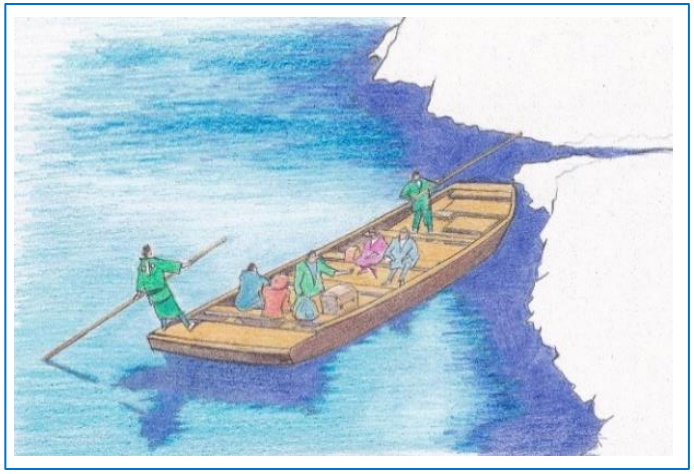
現在の地形図に縄文海進図を重複させた図



小倉村から須賀湊まで高瀬舟で約6時間。凪いだときの帰路は2人が両岸から引き3日位かかった

相模川はその源を富士山に発し、山中湖、相模湖、津久井湖を経て神奈川県中央部の平野を流れ下り、相模湾へ注ぐ県内最大の河川である。

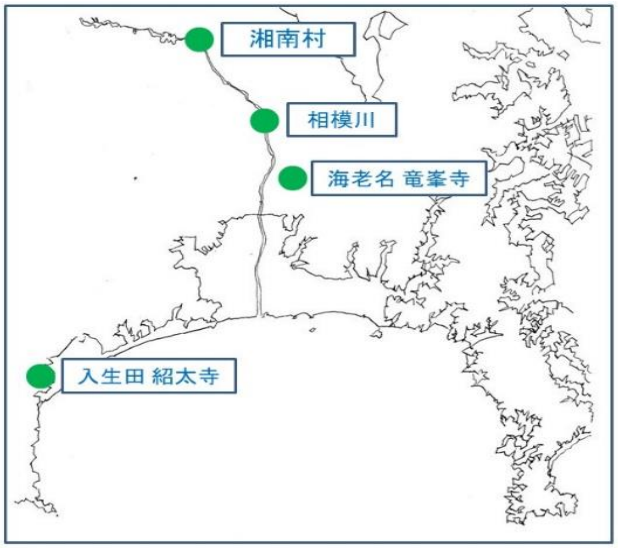
江戸時代は舟運が盛んで、上流から絹、木材、薪炭、下流からは海産物、醤油、雑貨などが高瀬船・平田船で運ばれ、河口にある須賀湊は相模湾でも有数の港町を形成していた。



小倉の渡しは、八王子を経てやって来る関東一円の大山参詣者を小倉から厚木まで運ぶのに役立った

上流には人や牛馬を運ぶ“小倉の渡し”で知られた小倉村があり、交通の要所として知られていた。

小倉村付近には、丹沢の木材を筏（いかだ）に組んだり、物産を運ぶ帆掛船のための“河岸場（かがんば）”があり、相模川流域でも活気のある村として存在感を示していた。

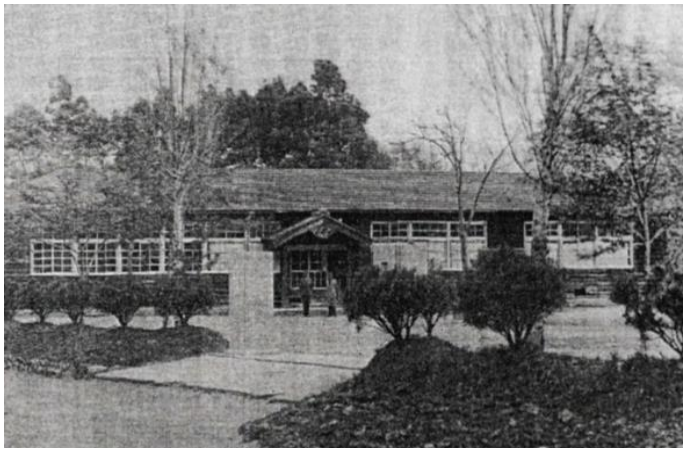


明治22年、明治政府による町村制施行時に“小倉村”と葉山島村が合併し新しい村名が必要となる。

小倉村戸長 馬場健二は 新しい村名として“湘南村”を発案、相模川上流に“湘南”の冠呼称が誕生する。

当時、相模の文人たちは、相模川を“湘江”と呼んでいた。若い頃、漢詩人大沼枕山（ちんざん）が主宰する塾の塾長を務めた馬場は、相模川流域を“瀟湘湖南”に見立て、村の呼称を発案したとされる。

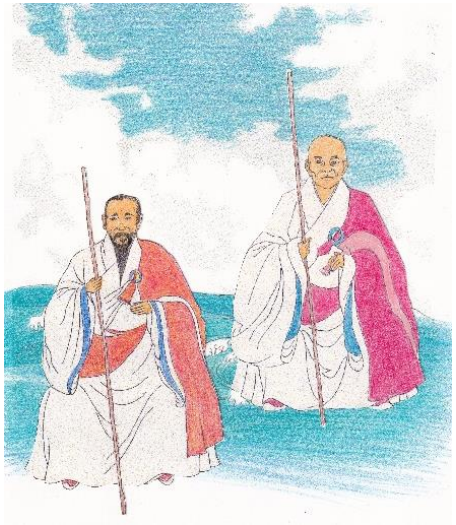
湘南村は津久井湖に近い



創設当時の湘南小学校

やがて両村の小学校が統合され “湘南小学校”が設立される。
その後 湘南村の3つの寺が合併し“小倉山湘南寺”が誕生。
相模原市には現在も “湘南小学校”と”湘南寺”が健在である。

湘南小学校（2017年撮影）



渡来した黄檗宗 木庵（左）と紹太寺
を開創した日本の禅僧 鉄牛（右）

江戸時代の相模の詩文に、相模川を“湘川”や“湘水”、 大山を“湘峡”や“湘岳”、鎌倉を“湘東”と表現した例が散見される。

“瀟湘湖南”に憧憬をもつ渡来僧や国内の学僧が、詩文に“瀟湘湖南”を引用したり、相模の風景に見立てて創作したことが作用したものと思われる。

黄檗宗寺院 紹太寺は稲葉氏一族や春日局の
墓所で知られる

江戸の初期、中国から禅宗3宗派のひとつの黄檗（おうばく）宗が、開祖“隠元（いんげん）”や“木庵”と共にやって来る。

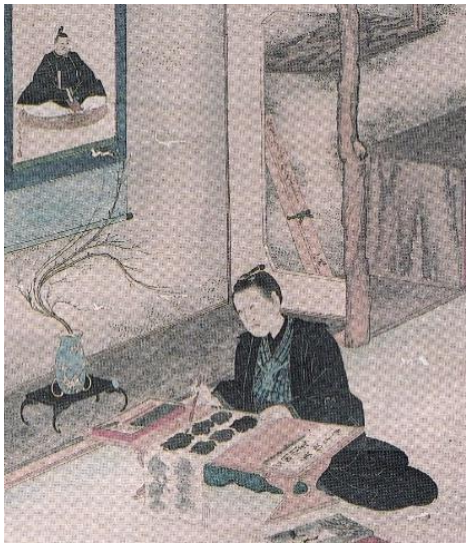
“木庵”から印可（宗教能力の証明）を得た日本の禅僧“鉄牛”は、小田原藩主稲葉候の依頼に応じて、入生田（いりゅうだ）に“紹太寺”を開山する。

龍峰寺は室町時代に創建され、昭和初期に
現在地に移された臨済宗建長寺派の寺院

“木庵” や“鉄牛” などの高僧が、相模の景色を“瀟湘湖南”に見立てた詩文を創作する。

“木庵”が紹太寺来訪時につくった境内百景詩のひとつが“湘江雪浪”。
相模湾の海浜を“湘江”に見立てた。

一方、紹太寺の“鉄牛”が海老名の龍峰寺訪問時につくった境内八景詩のひとつが“湘浦度船”。
鉄牛も相模川を“湘川”や“湘浦”に見立てた。

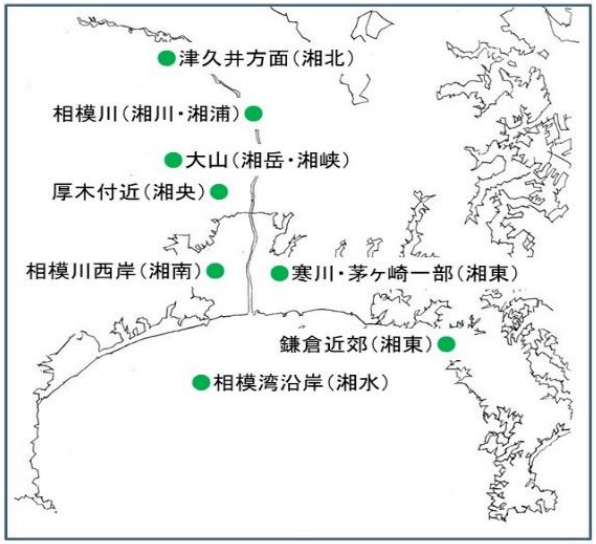


相模には “文人”と呼ばれる民間人が数多く存在し、知的教養として漢詩文や書画、俳諧などを学んでいた。

日本人の学び志向は世界でも突出していて、江戸時代には現在のコンビニの数ほど寺子屋が存在したが、相模も例外ではない。
漢詩文を学ぶ多くの文人が徐々に “湘南”を 拡散させていくことになる。

“湘南村”の名づけ親、小倉村の戸長 “馬場健一”もそのひとり。

茅ケ崎柳島の廻船問屋柳庵が描かせた学習する祖孫の姿

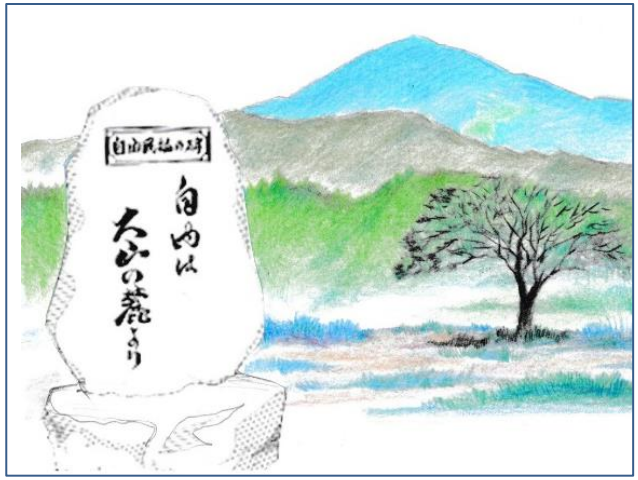


江戸時代、相模川を“湘川”“湘浦”、大山を“湘岳”“湘峡”、相模湾の海浜を“湘水”、鎌倉や鎌倉付近を“湘東”と呼んだ。

明治以降も、厚木付近を“湘央”、津久井方面を“湘北”、寒川や茅ケ崎の一部を“湘東”と呼ぶなど、相模川を中心に“湘”を冠した呼称例が存在した。

残念なことに、“湘南”が、いつ頃、どの辺りで発生したのか、具体的な記述例が見つからないが、“湘”には中国の絶景地を想起させる“雅称”パワーがあることは間違いない。s

“湘”を冠した地域呼称が相模川中心に展開



伊勢原市の山口家に立つ石碑（背景はイメージ）

“湘南村”誕生よりも 9 年遡った明治14 年、伊勢原、秦野、平塚、大磯、二宮の豪農や医者、教師らにより、日本初の自由民権結社“湘南社”が結成される。

創設者のひとり山口佐七郎が“湘南社”と名付けた理由は不明だが、活動地域を考えると、“相模湾”イメージから遠い。平成28年、山口を顕彰する石碑が建立されるが、碑文に表された文字、“自由は大山の麓より” が象徴的である。

明治13年　自由民権結社“湘南社”結成
明治22年　2村合併で“湘南村”誕生
明治26年　県会議員選挙の新聞記事“湘南の腥風”
明治28年　18回連載の新聞記事標題“湘南の夏”
明治29年　“湘南電気鉄道㈱”（茅ヶ崎～鎌倉）の創立願書
明治31年　蘆花が国民新聞に“湘南歳余”を掲載
明治32年　鎌倉/江の島避暑客の新聞記事“湘南だより”
明治33年　蘆花“湘南雑筆”掲載書籍がベストセラーに
明治36年　東京朝日の広告に“湘南海岸へ避暑旅行案内”
明治37年　二宮・秦野間“湘南馬車鉄道会社”設立
明治38年　横浜貿易新報に“湘南の避暑客”の記事掲載
明治40年　官設鉄道が新橋～国府津に“湘南急行列車”

“湘南社”や“湘南村”誕生以降の“湘南”という言葉の現れ方

“湘南”が海のイメージに変わったのはいつ頃からか？

念のため、“湘南社”や“湘南村”誕生以降の“湘南”という言葉の現れ方を調べてみる。

明治20年代の新聞記事に“湘南”が登場するが、海と結びつけるには内容的に無理がある。

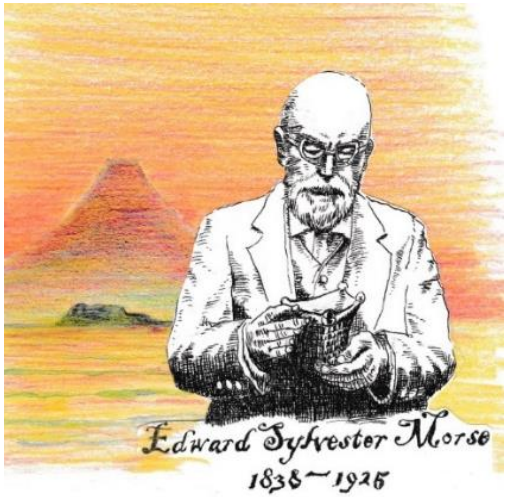
湘南と海が結びつくのは明治30年代以降であり、この頃から“湘南＝海”のイメージが形成されていく。

特筆されるのが、“湘南”を最初に全国ブランドにした“徳富蘆花”。

小説“不如帰（ほととぎす）”で知られる徳富蘆花は、東京赤坂から逗子に転居、“湘南雑筆”のもととなるエッセーを国民新聞に“湘南歳余”と題して掲載、文語文で相模湾や富士・箱根等の風景を描写した（明治31年）。

“湘南雑筆”を含む“自然と人生”を出版したところ、湘南の景観の描写が評判を呼んで版を重ね、当時としては異例の 50万部を超えるベストセラーとなる（明治33年）。

湘南モチーフの最初のベストセラー作家 徳富蘆花

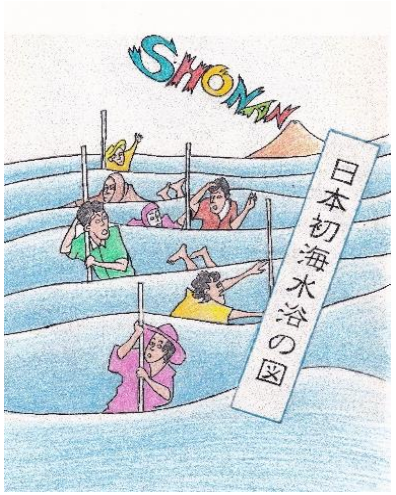


モースは江ノ島に臨海実験所を設け貝類を中心に採集した

蘆花の“自然と人生”がベストセラーとなる兆候は江戸末期から現れていた。

“最初の兆候”は、相模湾の景観に感動し、漢詩文の世界とは違った魅力を気づかせてくれた外国人たちの記録。

通訳生として日本に赴任したアーネスト・サトウが“世界一の風景”と評し、大森貝塚の発見者エドワーズ・モースが夕暮れの相模湾に感動、来日直後のラフカディオ・ハーンが海の陽光の素晴らしさに魅了されるなど、各人各様に湘南の美しさを発見していた。



健康療法が目的だった初期の海水浴

“次なる兆候”は、日本最初の海水浴場や海沿いの別荘地に現れる。

当初、健康療法として注目された海水浴は、由比ガ浜や大磯などを先駆けとして湾岸に拡がり、新聞見出しに“湘南遊覧”や“湘南避暑”の文字が目立ち始める。

その後、鎌倉・江の島・葉山・大磯等に別荘ブームが到来。
“湘南”と海を結びつける事例が増えるにつれ、蘆花の“自然と人生”がベストセラーとなる環境が整っていく。

蘆花は、漢詩文 に閉じた“中国の湘南” から日本人の感覚と言葉で表現する“日本の湘南”へ“湘南”のイメージを大きく変貌させる。

自然を描写した蘆花の美しい文章は、戦前の中学の教科書に必ず一節が引用され、当時の文学青年に影響を与える。

30年で185万部を売った“不如帰（ほととぎす）”の作者が著したという相乗効果もあり、“海” のイメージを装いながら、“湘南”が全国に浸透していく。

1994（平成6）年,湘南ナンバーの発行が開始される

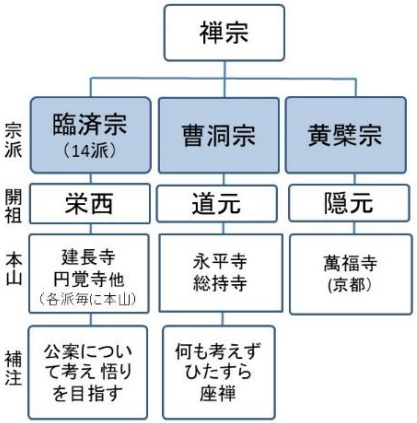
こうして、中国の“瀟湘湖南”に発した“湘南”呼称は、日本へ上陸した後、“相模川”を中心としたエリアを経て“海のエリア”へ移行していく。

“湘南の由来”には、“瀟湘湖南”に発する説の他に、相模国の南を意味する“相南”にさんずいがついて“湘南”になったとする説もある。

しかし、言葉として定着した形跡が見つからないのが不思議である。

【参考7】湘南村地域の歴史

【参考8】日本の禅宗



【参考9】湘南に関わる特記事項

西暦	和暦	“湘南”に関わる特記事項
1862	文久2	イギリス人アーネスト・サトウ、船上から見た風景を世界一の風景と記録。
1870	明治3	アメリカ人グリフィス、船上から見た風景に地上で最も最も美しい国のひとつと記録。
1872	明治 5	フランスの法律家ブスケ、片瀬海岸で夕食前に海水浴。
1876	明治 9	フランスの東洋学者エミール・ギメ、片瀬海岸で海水浴。
1877	明治 10	アメリカ人エドワード・モース（大森貝塚発見者）、江の島からの海の印象を記録。
1880	明治 13	ドイツ人医師ベルツ、鎌倉から江の島への途上の印象を“ベルツの日記”に記録。
1880	明治 13	大住・淘綾郡長山口佐七郎、自由民権結社“湘南社”を設立。
1882	明治 15	イギリス人コッキング、江の島に日本初の植物園を設立。
1884	明治 17	由比ガ浜に海水浴場開設。
1885	明治 18	初代軍医総監松本順、大磯・照ヶ崎に我が国初の海水浴場開設（異論あり）。
1886	明治 19	藤沢・鵠沼に海水浴場が開設。
1887	明治 20	東海道線が国府津まで開通。大磯にも停車場が開設し旅館や別荘が建つ。
1889	明治 22	小倉村と葉山島村が合併し“湘南村”が誕生。
1890	明治 23	イギリス人文学者ラフカディオ・ハーン、来日直後に江ノ島を訪れ、印象を記録。
1893	明治 26	県会議員選挙の新聞記事の見出しに“湘南の腥風”。
1894	明治 27	“日本名勝地誌”に相模湾沿岸の葉山～国府津迄の海水浴場が 8 か所以上掲載。
1895	明治 28	8/2 から 8/24 まで 18 回連載の新聞記事の標題が“湘南の夏”。
1896	明治29	“湘南電気鉄道㈱”（茅ヶ崎～片瀬～鎌倉）の創立願いが提出される。
1898	明治 31	徳富蘆花、国民新聞に“湘南歳余”を掲載。
1899	明治 32	新聞に鎌倉・江の島付近の避暑客の状況を報じた“湘南だより” が掲載。
1900	明治 33	エッセイ“湘南雑筆”を掲載した徳富蘆花の“自然と人生”がベストセラーに。
1902	明治 35	別荘地の政治家を風刺した“湘南太平の夢“と題した新聞記事が掲載。
1903	明治 36	東京朝日新聞広告に“湘南海岸への避暑旅行案内”が登場。
1904	明治 37	二宮～秦野間を運行する“湘南馬車鉄道会社”設立。
1905	明治 38	横浜貿易新報（現神奈川新聞）に“湘南の避暑客”と題する記事が掲載。
1906	明治 39	横浜貿易新報（現神奈川新聞）に“湘南避暑地が大繁盛”と題する記事が掲載。
1906	明治 39	“湘南村”に“湘南小学校”が誕生。
1907	明治 40	官設鉄道が新橋～横須賀間、新橋～国府津間に“湘南急行列車”を運行。
1907	明治 40	官設鉄道が“湘南回遊券”を発行。
1907	明治 40	観光ガイドブック“湘南の夏”を“湘南社”が発行。s
1909	明治 42	鉄道院が発行の“鉄道院線沿線遊覧地案内”に“湘南一帯の風光”の項目掲載。

【引用文献・資料】

63：図“貝が語る縄文海進”松島義章,有隣新書,200,の図を活用
64：図：“城山町史 7 通史編・近現代”, 城山町,1997,写真を模写
65：図“城山町史 7 通史編・近現代”, 城山町,1997,写真を模写
66：文：湘南遺産HP “湘南の由来とエリアを探る”その3
図“貝が語る縄文海進”松島義章,有隣新書,2006,p9の図を活用
67：湘南遺産HP “湘南の由来とエリアを探る”その3
図：城山風土記,城山町史編さん委員会,1997,
68：文：湘南遺産HP “湘南の由来とエリアを探る”その3
図：web情報/town.tohnosho.chiba.jp
69：文：湘南遺産HP “湘南の由来とエリアを探る”その3
図：web情報/NTT Resonant Inc.小田原暮らし2007.11.26
70：文：湘南遺産HP “湘南の由来とエリアを探る”その3
図：web情報/NTT Resonant Inc. 歴史を訪ねる旅85回相模海老名散策
71：図“写真集茅ヶ崎きのうきょう”茅ヶ崎市,1987,
72：文：湘南遺産HP “湘南の由来とエリアを探る”その3
“「湘南」の誕生”増淵敏之,RittorMusic,2019,p14
web情報/Wikipedia “湘南”、明治期の「湘南」
図“貝が語る縄文海進”松島義章,有隣新書,2006,p9の一部使用
73：図：web情報/カナロコ（神奈川新聞）“自由民権運動伝える石碑除幕”
文：朝日新聞湘南版、2016,12,19, 2017,6,10
74：文：湘南遺産HP“湘南遺産アーカイブ（年表編）”
75：文：web情報/“湘南プロムナード”湘南の発祥、徳富蘆花の「湘南雑記」
「湘南の誕生」より
図：“茅ヶ崎市史ブックレット11”茅ヶ崎市史編集委員会編 2009
76：文：湘南遺産HP“湘南遺産アーカイブ（年表編）”
77：文：湘南遺産HP“湘南遺産アーカイブ（年表編）”
78：文：“茅ヶ崎市史ブックレット11”茅ヶ崎市史編集委員会編 2009
80：文：湘南遺産HP“湘南遺産アーカイブ（年表編）”

❖第3話－1 完了